

第4章 メンフィス遺跡群の特質と保存整備計画の方向性

アブ・ロアシュ (アブ・ラワシュ)

河合 望*

1. 遺跡のエジプト学的特質

アブ・ロアシュは、メンフィス・ネクロポリスの最北部にある遺跡で、ちょうどナイル川がデルタ地帯に向けて分岐する地点からの西側の延長線上の耕地と砂漠の縁辺部にあたる。ギザ遺跡からは北へ約8kmの場所に位置する丘陵ゲベル・アル＝ギギガ (Gebel al-Ghigiga) の一部である。名前は、19世紀に付近にあった村の名称が由来であるが、現在ではカイロ近郊の比較的大きな町に接している。この近接する町の市街地の拡大によって遺跡は破壊され続け、現在も遺跡は開発の煽りを受けている。

アブ・ロアシュ遺跡は、古王国時代第4王朝のジェドエフラー王のピラミッド・コンプレックスが位置する砂漠西側奥部の丘陵頂部と、ワディを挟んで耕地との縁辺部に位置する丘陵頂部の2カ所に分かれる。先王朝時代末からコプト時代までの長期間にわたる遺構が存在するが、その多くはあまり知られていない (Baud et al. 2003)。

(1) 先王朝時代末から初期王朝時代の遺構

耕地際の低位砂漠には、先王朝時代末から初期王朝時代の墓地が存在したことが知られている。この墓地は、オランダの考古学者クラッセンス (A. Klasens) とエジプトの考古学者ハワス (Z. Hawass) によって発掘調査が実施され、ナカダ III B～D 期に年代づけられる土壙墓や小型の日乾煉瓦製マスタバ墓が検出されている (Klassens 1957-9; Hawass 1980)。しかし、これらの初期の墓の大部は土地の造成によって破壊されたという。現在、この時代の墓地は、耕地際の丘陵部に位置するもののみである。丘陵の東側には、発掘者のフランスのエジプト学者モンテ (P. Montet) の名前から「M」と名付けられた第1王朝デン王の時代の大型のマスタバ墓が数基存在する (Montet 1938-46; Tristant 2008)。これらの墓の位置は、ちょうど耕地を望む丘陵頂部の崖際にあり、北サッカラの初期王朝時代のマスタバ墓群の立地に類似している。マスタバ墓の規模とその周囲にある殉葬墓と思われる付属墓から、これらの墓はエリートに属するものと考えられている。近年のフランス隊による発掘調査では、木造船が出土している。

(2) ジェドエフラー王のピラミッド・コンプレックスとその周辺

アブ・ロアシュで最も重要な遺構は、第4王朝第3代の王ジェドエフラーのピラミッド・コンプレックスである。この遺構は標高160mの丘陵頂部に位置し、大規模な斜路と玄室を丘陵の岩盤に穿って造営された。1839年にヴァイスとペリングが初めて調査を行い、その後、1880年代に採石場として利用されたため、大き

* 早稲田大学高等研究所准教授

な破壊を受けてしまった。1901年には、フランスの考古学者シャシナ (É. Chassinat) がピラミッドの南側にある葬祭殿とポート・ピットの発掘を行った。この時、ポート・ピットからは珪質砂岩製のジェドエフラー王像を含む彫像片が発見された (Chassinat 1901)。

1995年から、フランス・オリエント考古学研究所とジュネーヴ大学の合同調査隊が、ジェドエフラー王のピラミッド・コンプレックスの調査を開始し、多くの成果を挙げた (Valloggia 2004, 2011)。この調査により、ジェドエフラー王のピラミッドはギザのメンカウラー王のピラミッドとほぼ同じ規模で、1辺が106.20m、高さ65.5m、傾斜角は $51^{\circ} 57'$ であったことが判明している。ジェドエフラー王のピラミッドの参道は、北側に位置し、2km以上の長さがあったと推測されている。したがって、葬祭殿の軸先は南北方向に向いている。また一般的に河岸神殿の傍に位置する神官の住居、工房、倉庫はピラミッドの傍で発見されている。

前述の耕地際に位置する丘陵の西側の頂部には、ジェドエフラー王の時代の高官のマスタバ墓群が位置している (Baud et al. 2003)。この墓地は「F」という名称が付けられている。この中で少なくとも3基は、ジェドエフラー王の王子のもので推定されている。また、前述の初期王朝時代のマスタバ墓群のあるM墓地内にも高官の墓があり、少なくとも1基は、ジェドエフラー王の葬祭神官の墓である。

(3) 古王国時代以降の遺構

古王国時代第4王朝以降は、造墓活動が途絶えるが、新王国時代に耕地際のF-M墓地のある丘陵に接する別の丘陵に岩窟墓が造営されたことが知られている。しかし、当該地域の活動が再び活発化したのは末期王朝時代であった。特に重要な遺構は、通称「要塞 (Fort)」と呼ばれる280m×205mの日乾煉瓦の壁体遺構とフランスの考古学者ビッソンが発見した岩窟遺構群である (Bisson 1924-5)。これらの遺構は、同時代のサッカラの動物墓地や動物の聖所に類似しているという。年代的にこれらの遺構は末期王朝時代第30王朝時代に属し、最も規模の大きい岩窟遺構は、ネクタネボ2世に帰属することが判明している。

2. アブ・ロアシュ遺跡の現状

アブ・ロアシュは、メンフィスのネクロポリスの極めて重要な遺跡であるものの、ユネスコの世界遺産「メンフィスとその墓地遺跡～ギザからダハシュールまでのピラミッド群」の範囲に含まれていない。このため、特に近年になってアブ・ロアシュ遺跡は、他の遺跡に比較して、宅地造成、採石活動、ゴミの廃棄場が拡大している。

人工衛星の画像からも当該遺跡における宅地造成、採石活動、ゴミの廃棄場の拡大は顕著である (Fig.1)。たとえば、2003年2月撮影の衛星画像と2007年2月撮影の衛星画像を比較すると、4年間でゴミ廃棄場の規模が著しく拡大していることがわかる (Figs.2,3)。また、2007年6月撮影の衛星画像と2010年4月撮影の衛星画像を比較すると、約3年の間にジェドエフラー王のピラミッドの参道の北部付近で採石活動が拡大していることがわかる (Figs.4,5)。遺跡の北東部の低位砂漠では、住宅地や公共施設と思われる建物が密集し、すでに遺跡が破壊され、脅かされている状況が確認できる。以下では、現地での視察を基に個々の遺跡群の現状について報告する。

(1) ジェドエフラー王のピラミッド・コンプレックス

前述のように1995年から2007年にかけてフランス・オリエント考古学研究所とスイスのジュネーヴ大学の

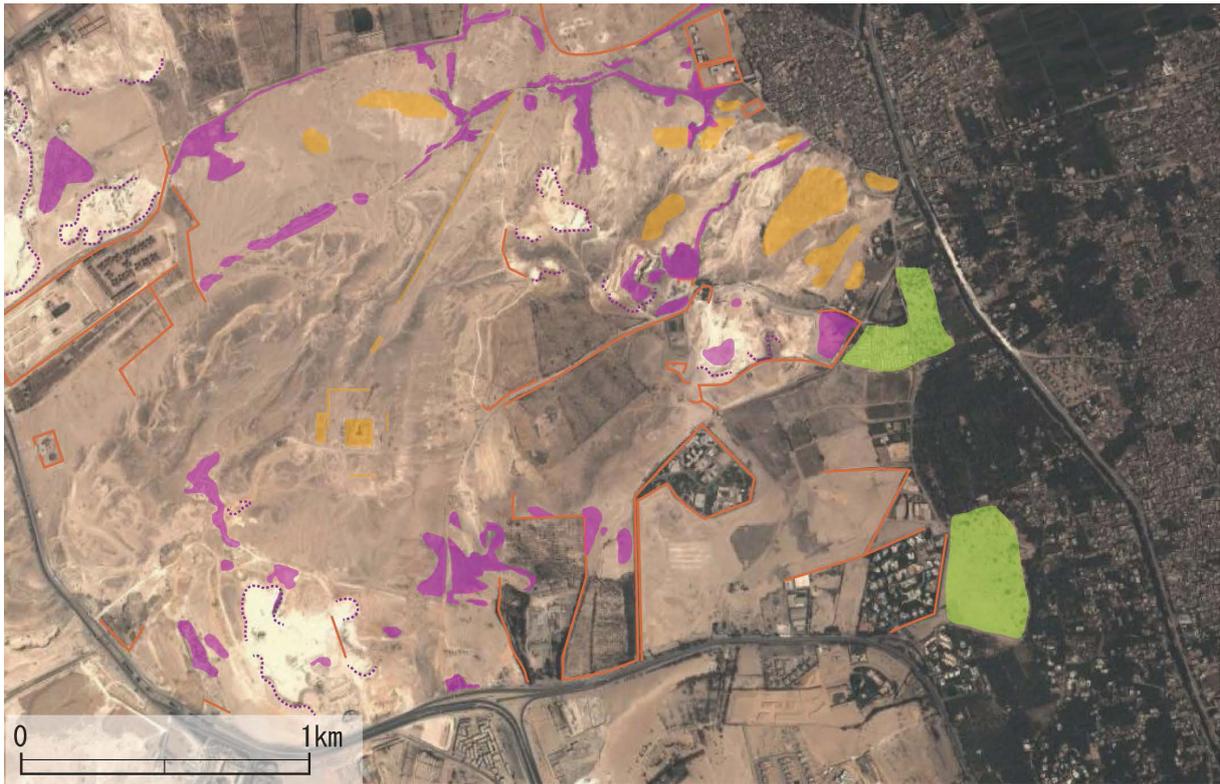


Fig.1 アブ・ロアシュ遺跡の現状 (2013年現在)

赤紫のトーンが廃棄物、緑のトーンが現代墓地、山吹色のトーンが遺跡範囲、山吹色のラインが大規模遺構の外側ライン、オレンジのラインが現代の壁（現代建造物がある範囲の指標）、紫の点線が掘削の及んでいる範囲

合同調査隊は、ジェドエフラー王のピラミッド・コンプレックスの調査を行い、発掘調査と並行して遺跡の保護、整備をおこなった。しかし、露出したピラミッドの石灰岩の石材は、自然の浸食や大気汚染などにより風化が進行している。調査隊は、葬祭殿の日乾煉瓦製の壁については、遺構の平面プランの理解を促すのと同時に保護を目的として、修復と厚さ約10mmのキャッピングをおこなっている。葬祭殿の修復は2004年に終了したと報告されているが(Mathieu 2004)、踏査成果によれば崩壊した部分がいくつか見られた(Figs.6,7)。雨等により自然の浸食を受けたり、便所に使用したりするなどの不適切な人為的活動により崩壊したものと思われる。ピラミッドの周壁においても保存と復原が講じられ、2003年に完成したと報告されているが、こちらは比較的良好な状態であった(Mathieu 2003)。

ピラミッド・コンプレックスから北東に約2km延びる参道は、ピラミッド側の終点ではフランスとスイスの合同調査隊が保存修復の措置を講じているが、耕地側の起点ではゴミの廃棄場や住宅地の中にあり、遺構として認知されている状況ではない。ゴミ廃棄場のプラスチック、アルミニウムなどの廃棄物は、土壌汚染をもたらしている可能性がある。参道に接続する河岸神殿の位置は、現在軍事基地内にあり、その状況を確認することができない。

(2) 耕地際丘陵地区の墓地

耕地際の丘陵頂部に位置する先王朝時代末から古王国時代第4王朝にかけての墓地は、近年でもフランス隊による発掘調査が行われているため、破壊や廃棄物の投棄などの問題はない。しかし、当該遺跡の南側にはヴィ



Fig.2 2003年2月のアブ・ロアシュ遺跡

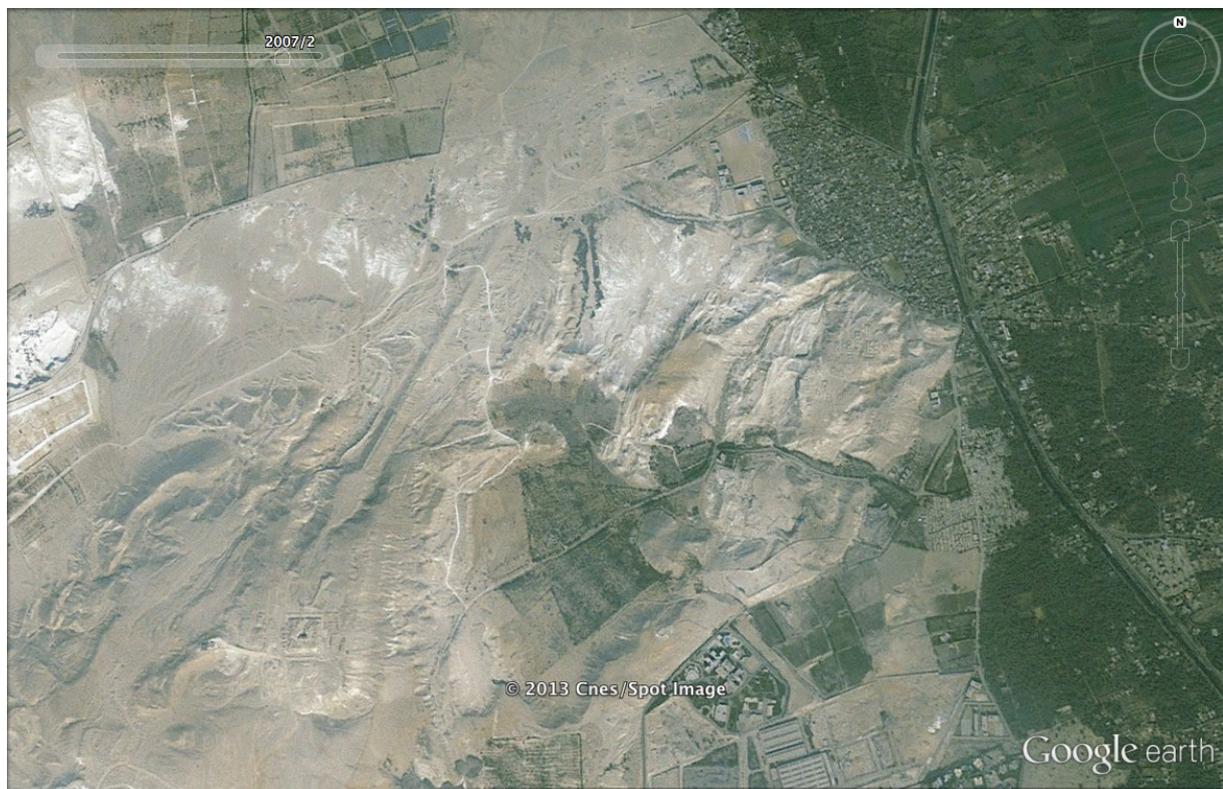


Fig.3 2007年2月のアブ・ロアシュ遺跡

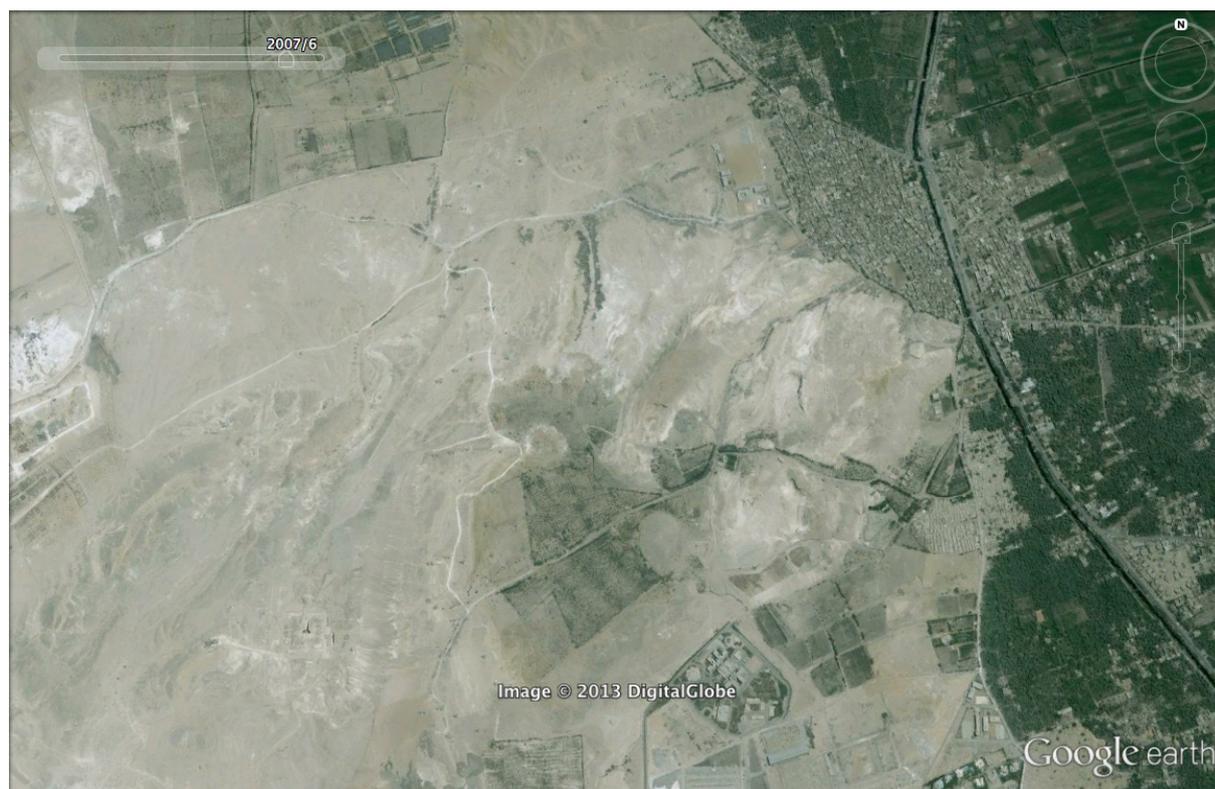


Fig.4 2007年6月のアブ・ロアシュ遺跡

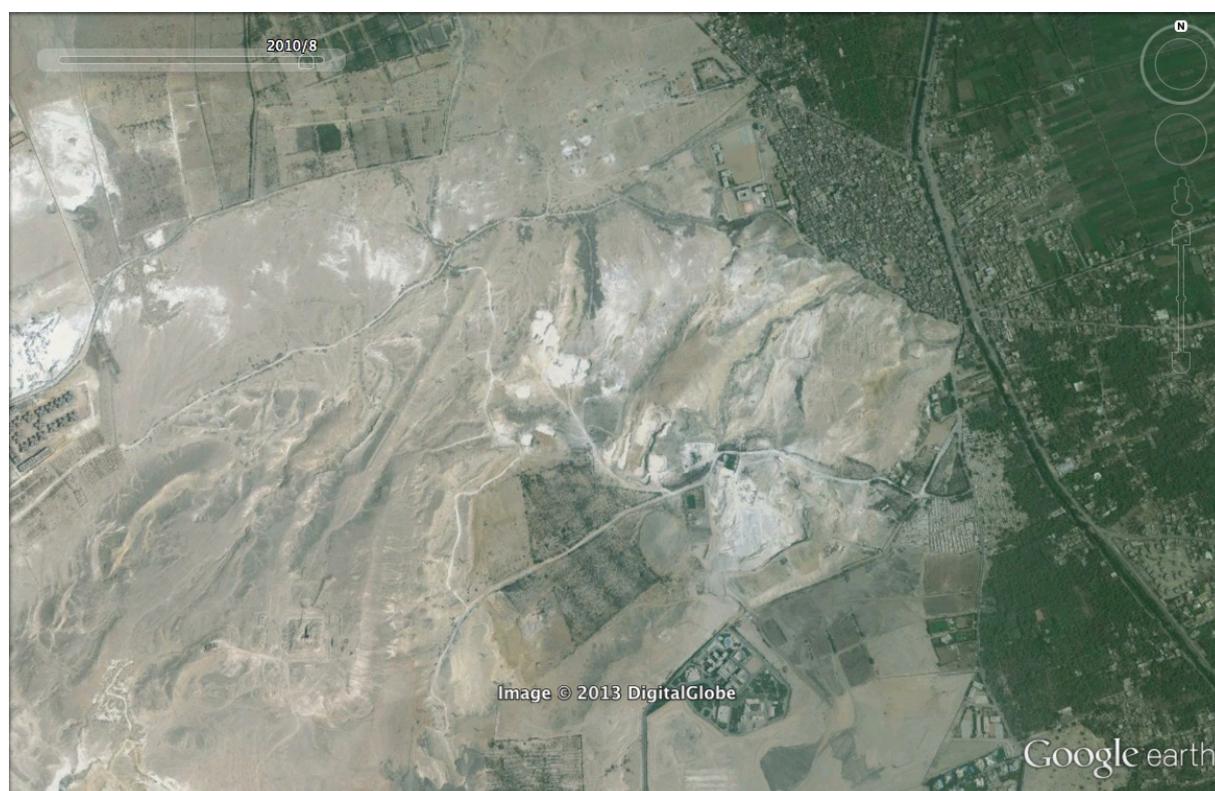


Fig.5 2010年4月のアブ・ロアシュ遺跡



Fig.6 ジェドエフラー王のピラミッド葬祭殿 (2012年9月21日)



Fig.7 ジェドエフラー王のピラミッド葬祭殿 (2012年9月21日)

ラなどの建設が進んでおり、開発によって遺跡景観が悪化している (Fig.8)。発掘された遺構そのものについては、現在のところ自然の浸食から護るための保護や整備は実施されていない。ただし、大型の高官のmastaba墓群は、極めて特徴的な石造建造物なので、今後一般公開のための整備が実施されることが望まれる。

一方、丘陵の北東部の市街地と接する場所では、ゴミの廃棄場が拡大し、所々ではゴミが焼却された痕跡が見られた。この場所には末期王朝時代の岩窟遺構があり、ゴミの焼却によって煤で汚染されていた (Fig.9)。また、この付近にはゴミの廃棄や土木工事用のトラックが頻繁に運行しており、排気ガスも付近の遺跡に悪影響を及ぼしていると思われる (Fig.10)。さらに、この周辺では非合法の宅地開発が急速に進んでおり、岩窟遺構の約 20m 手前に家屋が建設されたことが報告されている (Fushiya 2010: 340)。

3. 保存整備の方向性

以上のように考古学的重要性が極めて高いにもかかわらず、アブ・ロアシュは長い間遺跡の保存整備がほとんど行われていなかった。近年になってスイスとフランスの合同調査隊がジェドエフラー王のピラミッド・コンプレックスで調査を実施したため、当該地区での保存整備は僅かに進んだものの、開発の著しい北東の耕地際丘陵地区の遺構周辺は、ほとんど保存整備が実施されていないのが現状である。

前述したように、アブ・ロアシュはメンフィス・ネクロポリスの一角であるにもかかわらず、世界遺産のバッファゾーンにも含まれず、さほど重要視されてこなかった経緯がある。その結果、遺跡の存在を示す看板も遺跡の東側の入口にあるのみで、遺跡の範囲も認識されず、どこからでも遺跡に侵入することが可能である。我々



Fig.8 耕地際丘陵地区の墓地の南に建設中のヴィラ



Fig.9 岩窟遺構とゴミ投棄の状況



Fig.10 遺跡に隣接する道路に止められたトラックと投棄されたゴミの山

が訪れた際にも遺跡ガードの小屋は存在せず、夜間照明も配備されていないので、盗掘や破壊が容易に行える状況である。

このような現状を打開するには、まずアブ・ロアシュ遺跡のバッファゾーンを設定し、保護壁、フェンス、特定の進入路、夜間照明、ガード小屋等を早急に設置する必要がある。また、すでに指摘されているように、訪問者のための遺跡の案内板や導線の設置なども課題である。同時に、一国も早くエジプト政府は不法建築や不法投棄を取り締まるべきであろう。

エジプト革命直後の混乱期にあって、遺跡の保存整備は後回しになる可能性が高いが、まずは、近年発掘調査が終了したジェドエフラー王のピラミッド・コンプレックスの周辺で一般公開を見据えた遺跡整備を実施するのが現実的であろう。理想的には、ピラミッド・コンプレックスへの入口にヴィジターズ・センターを設けて、古王国時代第4王朝におけるアブ・ロアシュ遺跡あるいはジェドエフラー王のピラミッドとその周辺施設について学び、遺跡を見学するのが望ましい。ヴィジターズ・センター内には、近年の発掘調査で明らかになったジェドエフラー王のピラミッドの完成時の想定復原図あるいはジオラマなどの展示が含まれるべきであろう。

註

- 1) ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は、1979年にメンフィス・ネクロポリスを世界遺産に登録したが、その範囲は大ピラミッドで有名なギザ遺跡からダハシュール遺跡までに限られている。ユネスコ世界遺産の「メンフィスとその墓地遺跡ーギザからダハシュールまでのピラミッド群」については、<http://whc.unesco.org/en/list/86> を参照。
- 2) アブ・ロアシュ遺跡の現地視察は、2012年9月21日に実施された。